

# 学部教育活動評価委員による教育学部外部評価の分析

— 第七期（平成28年・29年度）の評価票から —

平成30年9月

島根大学教育学部

「教育臨床総合研究17 2018研究」

## 学部教育活動評価委員による教育学部外部評価の分析

— 第七期（平成28年・29年度）の評価票から —

Exploring the Third-Party Evaluation on the Education Practices of the Faculty of Education at Shimane University : Evaluation on the Practice of 2017 Fiscal Year

長谷川 博 史\*  
Hiroshi HASEGAWA

畑 智 子\*\*\*  
Tomoko HATA

佐々木 直 樹\*\*  
Naoki SASAKI

近 藤 翔 平\*\*\*  
Shohei KONDO

### 要 旨

本学部の外部評価委員である学部教育活動評価委員に、2年任期の終了年度末に「外部評価票」による質問紙に答える形で外部評価をお願いしている。本稿では、第七期にあたる平成28年度～29年度の評価結果を分析し、今期の成果と次期に向けた課題の抽出を試みた。

〔キーワード〕 外部評価 FD

### I 学部教育活動評価委員会の役割と活動

山陰両県の学校教員養成を担う学部として平成16年度に改組した鳥根大学教育学部では、その直後から外部評価に関する組織を設置し、教育改善に努めてきた。その経緯は既行の報告書に詳しい（参考文献参照）。

また、平成28年度からは、鳥根大学・鳥根県教育委員会・鳥取県教育委員会を構成機関とする「山陰教師教育コンソーシアム」が新たに設置され、外部評価もその活動の一環に組み込まれることとなった。同コンソーシアムは、構成機関の連携を推進・強化し、教員養成から教員研修までの教育・研修システムを構築し、地域や学校の現代的な教育課題に対応でき、地域の教育力向上に資する教師を育成することを目的とするものである。そのために、鳥根大学教育学部と鳥根大学教職大学院における教育活動の評価も、中心的な事業の一つに位置づけられている（「山陰教師教育コンソーシアム規約」平成27年12月25日制定）。

鳥根大学教育学部の外部評価を行う組織である学部教育活動評価委員会は、その設置要項（「鳥根大学教育活動評価委員会設置要項」平成28年6月1日一部改正）のなかで、学部における教員養成教育の内容、方法、実績等の外部評価に関する業務を行うものとされている。委員

\*教育学部附属FD戦略センター副センター長

\*\*教育学部附属FD戦略センター兼任教員（授業改善・外部評価部門）

\*\*\*教育学部附属FD戦略センター

は、(1) 教育行政、(2) 学校教育、(3) 社会教育・青少年教育・スポーツ、(4) 芸術文化・NPO、(5) 企業・報道関係・その他市民社会、の5分野から山陰両県の有識者(分野ごとに2名程度、任期2年)を選出し、山陰教師教育コンソーシアム会長が委嘱するものとされている。

平成28年度・平成29年度は、平成16年の教育学部改組時から数えると、第七期目にあたる。委員は両年度ともに10名(交代により延べ14名)に委嘱し、任期中の活動実績は下記の通りである。

#### 平成28年度

##### 10月13日(木) 第1回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部附属小学校及び中学校において開催し、学校教育実習Ⅳ(学部3年生による本実習)の視察、および学部教育概要説明と質疑・協議を行った。出席委員は9名。



学校教育実習Ⅳの視察

##### 12月7日(水) 第2回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において実施し、大学における授業(「学校教育実践学原論」「英作文初級1」「技術科教育臨床」「作曲基礎理論2」)の視察、学部3年生の希望者を対象とする「面接道場」(学部教育活動評価委員が面接員役を担当)、および入試・就職を中心とする学部教育現況説明と質疑・協議を行った。出席委員は9名。



質疑・協議

#### 平成29年度

##### 9月28日(木) 第1回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において実施し、改組にともなう教育組織やカリキュラムの変更点を中心とする学部教育概況説明と、学部2年生を対象にグループ別協議等を通じて1000体験学修の振り返りを行う「充実期セミナー」の視察、および質疑・協議を行った。出席委員は5名。



充実期セミナーの視察

12月6日(水) 第2回学部教育活動評価委員会

島根大学教育学部棟において実施し、学部4年生との学生懇談会、学部3年生の希望者を対象とする「面接道場」(学部教育活動評価委員が面接員役を担当)、および入試・就職を中心とする学部教育現況説明と質疑・協議を行った。出席委員は9名。



学部4年生との学生懇談会



学部3年生を対象とする面接道場

2年任期の終了年度には、質問に回答する形で記入していただく「外部評価票」によって、各評価委員の外部評価が行われる。その評価票の分析とまとめを行って、次期のFD戦略を企図することが学部FD活動の基軸となっている。本論では、第七期(平成28年・29年度)における本評価票の分析を行い、今期の成果と次期に向けた課題の提示を主旨とするものである。

次章以降、質問紙の様式に沿って外部評価票の記述内容に関する分析を行い、全体的なまとめを行う。

## II 島根大学教育学部・学部教育活動評価委員による外部評価結果(平成28年・29年度)

### 【項目1：本学部の地域社会における存在意義、貢献度について】

設問1-1 「教員養成特化型学部」である本学部の「存在意義」あるいは「貢献度」について、みなさま、あるいはみなさまの周囲では、どのように認知されているとお考えでしょうか。率直なご意見をお聞かせください。

### 【結果と考察】

この質問項目は、本学部の「①存在意義」と「②貢献度」について、委員やその周囲における「③認知度」をうかがったものであり、それに関連して委員からは本学部に向けた「④期待」にも触れられている。

#### 「存在意義」・「貢献度」

本学部の「存在意義」に関しては、主として3つの観点から以下のような回答をいただいた。第一に、「少子化・高齢化・過疎化が急速に進む地方において、「人財」を育てる基礎となる教員を養成し社会に送り出す学部は重要性を増していくと考える」など、地方大学固有の役割を重視する回答である。これは、地方が直面している課題に即した存在意義を指摘されたものである。

第二に、「島根県のみならず、鳥取県の教員養成学部として、その使命は大きいものがある」「鳥取県の教育にはなくてはならない存在」「島根、鳥取両県で唯一の教員養成学部であり、存在意義、貢献度は大きいと感じています。地域の将来を考える上で教育は非常に重要であり、教育の質は教員の質に依るところが大きいと考えるからです。島根大卒の教員の質の向上は、島根の教育の質の向上につながります。大きな責務を担っている学部です」といった回答である。これらは、本学部が島根・鳥取両県の教員養成を担っていることを重要視する意見と考えられる。

第三に、「教員志望者、特に小・中学校教員志望者の島大への期待は高いと認識している」など、特に義務教育段階の教員養成の役割に着目した意見である。

このように、教員養成学部の一般的な意義にとどまらず、地方の直面している課題や、島根・鳥取両県で唯一の教員養成学部であること、あるいは校種の観点からみた教員養成の必要性など、本学部が担わなければならない多面的な役割を、再認識させられた。

本学部の「貢献度」については、全体的に高く評価していただいていることがわかった。たとえば、「優秀な教員を輩出している」といった総括的な評価だけでなく、「地元で教員養成特化型学部があることは非常に重要なことであり、地域にとっても大変貢献度が高い」「山陰地域唯一の教員養成特化型学部として機能していると認識している」「島根県の学校現場は、多くの教員が貴学部出身であり、島根の学校教育に貢献している」など、山陰唯一の教員養成特化型学部としての役割を、評価していただいた。また、「附属学校における教育実習研究は、一般校での実践に大変参考となっている」といった附属学校園の役割や、「多くの学生にボランティア参加いただいております、大変助けられている」といった1000時間体験学修としての活動の様子などについても、肯定的な評価をしていただいた。

#### 「認知度」

本学部の「存在意義」「貢献度」についての「認知度」については、今回も、大きく二つの意見に分かれた。

一つは、「学生の1000時間体験を中心として、地域や学校に対する貢献も広く認知されている」「教育現場における貴学部の認知度は高いと思われる。特に1000時間体験学修プログラムでの学生の様々な活動は学校現場のみならず、関わりのある自治体や社会教育現場においても、有用性は認められている」という、肯定的な意見である。これは、委員のなかに、すでに日頃から1000時間体験学修に御協力いただいている方が含まれていたことによると考えられる。

しかしその一方で、「私自身も評価委員に参加するまでは教員養成特化型であることは知りませんでした。よって存在意義や貢献度も私たちの周囲ではほとんど認知されていないのではないかと思います」「実績・功績に対し、それに見合ったアピールが対外的にできているかといった若干打ち出し方が弱いように感じる。島根大学という顔が見えるための手法が取られてもいいのではないかと。勿体無いように感じる」といったように、認知度の低さやアピールの弱さを指摘する意見もいただいた。この点は、従来から何度も指摘されてきたことであり、今回の他の回答項目においても繰り返し述べられていることであるので、まとめて後述したい。

#### 「期待」

以上に関連して、「県内高校生ニーズに応える学部であり続けてほしい」「山陰にある大学・



学部として、更に特色ある学部をめざしてほしい」「もう少し教員採用試験合格者が増えることを期待」するといった記述が散見され、本学部への期待の大きさを痛感させられた。

設問1-2 地域社会に対し、本学部の存在意義や貢献度を高めていくために、今後、どのような努力、工夫、方策、企画を行っていくべきでしょうか。委員のみなさまの視点から、自由なご意見をお聞かせ下さい。

### 【結果と考察】

いただいた回答のなかには、「1000時間体験学修は、学生にとって有意義であると同時に、学部の存在意義を地域社会に知らしめる点でも有意義」であるとか、「資質向上、実践力向上のため多くの事業を実施」しているなどといったように、本学部の取り組みを引き続き継続していくべきであるという意見も見られたが、多くは、現状における不十分な点を的確に指摘され、新たに取るべき方向性を示していただいた。

#### 課題／新たな企画の工夫を

まず第一に、今後の具体的な教育活動・体験活動の内容に踏み込む提案や意見である。たとえば、地域や人を育てることの素晴らしさや意義深さを学生に伝えるために、「1000時間体験学修の継続と新たな企画（例：地教委とコラボした学力向上等へのかかわり、ICTを活用した手法の検討など）」の導入を積極的に考えるべきである、あるいは、高校で実施されている地域課題学習に学生が参加する機会を設けるべきであるという提案、また、地域と連携した「まちおこし」的なプロジェクトを実施するのもおもしろいのではないか、マスコミに1000時間体験学修の様子を報道してもらうことも効果的ではないかという意見、などである。大学の駐車場不足といった、大学へのアクセスについて触れた意見もあった。

#### 課題／学校現場や教育委員会との連携強化を

次に、学校現場や教育委員会との連携を、さらに強化すべきであるという意見である。たとえば、「小中学校にどんどん指導に出て大学教員の知見を活かす工夫や企画が必要」であるという意見、「地域の特性を生かせる優秀な教員を輩出するために、県教育委員会との連携をより強化すべき」であるという意見、などである。今後は、山陰教師コンソーシアムを中心とする組織的な連携を活かしながら、学部教員による主体的・積極的な取り組みのさらなる検討が必要であると思われる。

#### 課題／学部や1000時間体験学修のPRを

最も多くの意見をいただいたのは、教育学部そのものや、1000時間体験学修について、地域社会に向けたPRが不足しているという指摘である。

学部全体に関しては、「ホームページ等で教員養成に特化していることがわかりやすい打ち出し方」や、「高校生や保護者にもわかりやすく興味を持ちやすいサイト構成」が、必要不可欠ではないか、という指摘をいただいた。

また、1000時間体験学修については、「1000時間体験学修などの際、共通のロゴを作成してユニフォーム化したり、腕章やバッジをつけるなど、地域に対して貢献しているとのアピールをし」た方がよい、「もっと学生の社会貢献ぶりを目に見える形で、地域の方にお披露目する

機会があると良い」、あるいは、地域で活躍する卒業生に広告塔（島大のPR役）としての役を担ってもらうのも効果的ではないか、といった意見をいただいた。それに関連して、教員養成学部の学生は、「子どもたちの身近に存在する文化人」であってほしいし、地域の人材育成の核として学生や卒業生が県民から期待される存在になることが重要であるので、そのためのPRも必要である、との指摘があったことは、大きな方向性を考えていくための重要な示唆を与えていただいたものと考えている。

**【項目Ⅱ：1000時間体験学修（基礎体験領域）について】**

学生の「教師力」を培う方策として、本学部では「1000時間体験学修」を導入しています。ここでの設問は、その約半数の時間を占めている、学童保育・社会教育・地域イベント・ボランティア活動・学校での学習支援といった教育活動や地域活動への参加についてお伺いします。

設問Ⅱ-1 学生の活動は、受け入れ先から好意的に受け止められているとお考えでしょうか。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1. とてもそう思う    | 2. ややそう思う    |
| 3. 一概には言えない   | 4. あまりそう思わない |
| 5. まったくそう思わない |              |

**【結果】 集計結果（下図1参照）**

10名の委員中、1名の無回答を除いた9名が肯定的に回答している。

設問Ⅱ-2 このような体験学修を伴う学生教育は、教員養成教育に必要な取り組みだとお考えでしょうか。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1. とてもそう思う    | 2. ややそう思う    |
| 3. 一概には言えない   | 4. あまりそう思わない |
| 5. まったくそう思わない |              |

**【結果】 集計結果（下図1参照）**

10名の評価委員の全員が、肯定的に回答している。

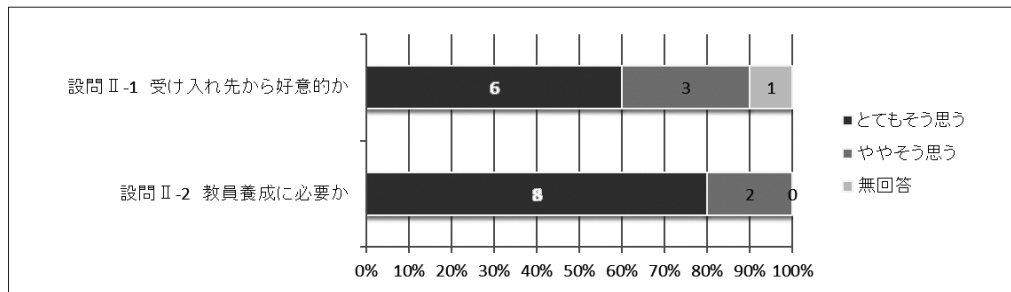


図1 設問Ⅱ-1, Ⅱ-2の集計結果

設問Ⅱ－3 このような体験学修をより有意義に深化させるためには、どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

### 【結果と考察】

設問Ⅱ－1，設問Ⅱ－2からもわかるように、今回も1000時間体験学修については、肯定的に評価していただいている。その一方で、今後の課題について以下のような意見をいただいた。

#### 課題／体験活動の場や内容を広げていくこと

1000時間体験学修としての活動の場について、さらに幅を広げていく必要があるのではないかと、という指摘である。たとえば、県内の高等学校にも体験活動の場を求めることを検討してほしい、あるいは、「親の置かれている状況や家庭環境が子供たちの生活や問題点に直結していると思」われるので、子どもに触れる体験だけではなく、親世代の社会に触れる機会があってもいいのではないかと、などの意見をいただいた。また、活動の内容についても、「社会教育施設（特に公民館等）においては、単なる事業支援、ボランティアスタッフというだけでなく、計画立案、運営等を学ぶことで、今後の学校と地域の連携・協働の在り方を考える機会となる」のではないかと、との意見をいただいた。

#### 課題／受入先との目的意識共有を徹底させること

次に、活動の受入先との意思疎通を、学生・教員ともに深めて、目的意識の共有をさらに徹底させていくべきだ、という指摘である。

たとえば、受入先への対応については、「体験前に学生と地域（受入先）が徹底した意見交換をするなど、両者が体験学修の趣旨をしっかりと理解・共有し、また効果を上げるための手法を大学側が地域（受入先）に提供する必要がある」、「受入機関へ1000時間体験学修の目的や学生たちが体験によって学ぶべき事柄を明確に説明する必要がある」、「受入機関が、学生を単なるお手伝いの発想で受け入れるのではなく、学生の力を伸ばすという視点を持つような説明が一層必要」などの指摘をいただいた。

#### 課題／事前・事後指導をさらに徹底させること

また、事前指導・事後指導を、さらに徹底させることが必要ではないかと、という意見もいただいた。たとえば、「必要最低限の安全教育、危機管理対策（AEDの使用方法や救急救命等）の指導の徹底が必要ではないか。また、事故が起きた場合の責任の所在、負うべき責任の範囲などの取り決めが受け入れ先と明確になされ、受け入れ先の末端の職員まで浸透していることの確認が必要」、「学生に対する事前の意識啓発が必要である。単に1000時間を消化するために参加するのであれば、意味は乏しい」、「受け入れ先・取り組む活動の吟味」が必要である、との意見である。こうした問題は、従来から鋭意取り組んできた課題ではあるが、点検・改善に一層の努力が必要であることを指摘されたものと考えている。

#### 課題／もっとPRを

ここでもやはり、PR不足であるとの指摘を受けた。「今回評価委員会に参加させて頂き、初めて1000時間体験学修をされていることがわかりました。すばらしい取り組みだと思いますが、地域の人たちにどれだけ知られているのでしょうか。学生さん自身による、PR活動をもっとされると良いと思います」との意見をいただいた。



【項目Ⅲ：面接道場等のキャリア教育について】

キャリア教育の一環として実施する「面接道場」は、教育実習を終え就職が間近となった学生に対しその意識を啓発するとともに、人生のプロである先輩のみなさまから面接を通してアドバイスをいただくことによって、新たな世界にチャレンジする意欲をもたせる目的で行っています。

設問Ⅲ－１ このような面接道場は、教員養成教育に必要な取り組みだとお考えでしょうか。また、そのように考えられる理由をお聞かせください。

1. とてもそう思う
2. ややそう思う
3. 一概には言えない
4. あまりそう思わない
5. まったくそう思わない

【結果】 集計結果（下図2参照）

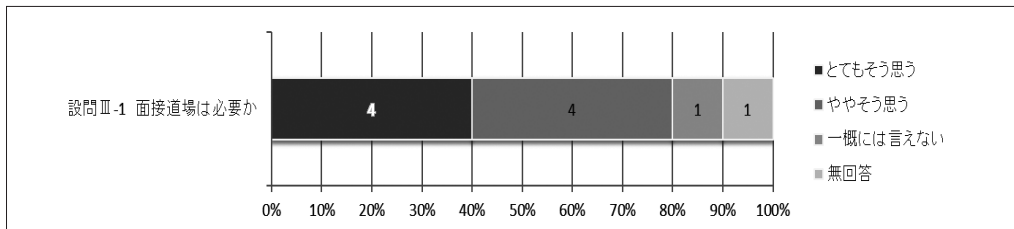


図2 設問Ⅲ－１の集計結果

10名の委員のうち8名が肯定的な評価だったが、「とてもそう思う」は4名にとどまった。そのほか、「一概には言えない」が1名。無回答1名は、面接道場を実施した日に欠席されたことによる。それぞれの理由は、以下のとおりである。

「1. とてもそう思う」と回答した委員からは、「学生としての学びでは得られない経験がある」、「学生にとっては、心の準備をはじめ学生のうちの取組むべきことに気付けると思う」、「教育実習・体験学修を通して、自分の進路が明確になりつつある絶好の時期に、活動の価値づけや試験に向けての具体的なアドバイスは、学生にとって見通しができる良い機会といえる」、「就職、人生を左右するかもしれない大事な場面の面接です。平常心で、自分らしさが出せるように準備しておくことは大事だと思います。面接はいくら本で勉強しても知識と実際とは違います。面接の裏事情も知っている面接官による面接道場は学生さんにとって有意義なものではないかと思います」など、面接を通して学ぶことの意義、面接対策としての効果が、理由として挙げられた。

「2. ややそう思う」と回答した委員からは、「面接は日々の授業の中で体験できると思う」、「新たな世界にチャレンジする意欲をもたせるという目的に添った取組かどうかは検討の余地がある」、「面接以前に〈教員になるとは〉〈社会に出て働くとは〉など、根本的な考え方について膝を突き合わせて話す機会の方が必要のように思う。そちらに比重を置いた方が面接道場

実施の意味があるのではないか。面接をそつなくこなす能力を体得する機会に比重を置くことは疑問が残る」などのように、面接の練習をする意義は認められるものの、方法や目的に改善すべき点があると指摘された。

「3. 一概には言えない」と回答した委員からも、「面接テクニックだけに秀でる学生を育てるような結果になっては本末転倒だという思い」もある、との率直な意見をいただいた。

設問Ⅲ－2 このような面接道場をより有意義に深化させるためには、どのような方策が考えられるでしょうか。また、キャリア教育を進めるためには、面接道場以外にどのような取り組みが考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

### 【結果と考察】

「今のままでよい」との意見もいただいたが、8名の委員から、以下のような提言をいただいた。この2年間は3年生の希望者に参加させたこともあり、特に2017年度は学生に対する面接員の人数が多すぎるという明らかな運営の難しさがあったため、それを踏まえた意見も多数見られた。

#### 課題／面接の内容や方法を改善すること

まず、今後の面接道場の進め方について、質問概要の事前告知をやめる、面接員も1～2名で対応する、3年生全員に面接を課すなど、具体的な提案があった。また、上級生から下級生へ面接道場の意義や良さが伝わるような工夫が必要ではないか、という意見もあった。

#### 課題／面接道場の内容や方法を改善すること

また、面接だけで終わるのではなく、さまざまな人と語り合う機会となるよう面接員の人数も工夫すべきだ、という提言もいただいた。たとえば、「面接練習の後に自由な形で懇談会を行い、仕事に取り組む心構えを養う」、「年令とともに経験・スキル・考え方は変化すると思う。それを時系列的に体験(20代、30代…)するため、年代別の人の話を聴くことも意義あると思う」、「一般の保護者や見守り活動に取り組む市民、現役の高校生・中学生・小学生などと語り合う機会があってもいいのではないか」、といった意見である。

#### 期待

なお、別の項目における回答のなかで、「専門領域に関する質問の際、中身の濃い回答を期待したが、「面接」というフォーマットに気をとられたせいも、あまり深い回答が得られなかったのが残念。面接をそつなくこなすよりも、荒削りであっても、自分がいかに教師という職業に対し、また、専門領域の研究に対し「知識」「情熱」「意欲」を持っているかが伝わる姿勢が表れている方が好印象を受けると感じた。今後の成長に期待したいと思う」という意見もいただいた。学生への期待であるとともに、学部や学部教員の課題であると受け止めた。

**【項目Ⅳ：学生の育ちについて】**

本学部では、「教師力」を3つの分野からとらえるとともに、それぞれを次のように意味づけています。

- ①教育実践力：学習者を理解し、身につけた知識や技能で教育を実践する力
- ②対人関係力：相手や目的に応じて適切なコミュニケーションを行う力
- ③自己深化力：必要な情報をさまざまな方法で探したり発信したりして、自己の知識や能力を深める力

設問Ⅳ 本日の学生懇談会や、面接道場、あるいは体験学修等における学生の様子をご覧になられ、学生の育ちに関する印象を、上に示した3つの分野を参考にされながらお聞かせください。

**【結果と考察】**

学生の育ちに関する印象は、「学生は、体験の中で指導者の言動をよく観察し、自分もそこに近づこうという強い意志が感じられた」などのように、ほとんどの委員から高い評価をいただいた。ただし、「懇談会や面接道場に参加している学生は問題ないが、それ以外の学生の状況がわからない」といった回答も複数見られ、限られた時間と機会だけでは、学生全体の印象をとらえにくいので、肯定的な評価もそれを踏まえてとらえなおしていかなければならないと考えられる。

①教育実践力については、教育実習の視察を通して、学生がとても先生らしく成長していると感じた、とのコメントをいただいた。ただし、教育実習の視察だけでは、どの程度育っているのか判断が難しいという、的確な指摘もいただいた。

②対人関係力については、「面接の回答や、懇談の様子から、4回生・3回生ともに大変高いレベルだと思います」などのように、かなり育っているとの評価を多数いただいた。また、コミュニケーション能力の重要性をあらためて指摘して、対人関係力の育成をさらに積極的に進めてほしいという意見も複数いただいた。

③自己探求力については、面接道場や学生懇談会に参加した学生は、かなり育っていると感じたが、それ以外の学生については測りかねるといった指摘をいただいた。

**【項目Ⅴ：教員志望状況や入学希望者動向について】**

＜教員志望状況について＞

設問Ⅴ-1 平成28年度及び29年度の教員採用試験受験率について、率直な感想をお知らせください。

平成28年度：卒業生157名 うち教員採用試験を受験した者115名 受験率73.2%

平成29年度：卒業予定者159名 うち教員採用試験を受験した者115名 受験率72.3%

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1. かなり多いと思った  | 2. 多いと思った  |
| 3. どちらともいえない  | 4. 少ないと思った |
| 5. かなり少ないと思った |            |

設問V-2 平成28年度及び平成29年度の教職就職率について、率直な感想をお知らせください。

平成28年度：教師の道へ進んだ者107名（非常勤講師/保育士を含む）教員就職率68.2%

平成29年度：（評価票作成時点では不確定であったため数値は空欄とした）

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1. かなり多いと思った  | 2. 多いと思った  |
| 3. どちらともいえない  | 4. 少ないと思った |
| 5. かなり少ないと思った |            |

**【結果】 集計結果（下図3参照）**

10名の回答中には、「5. かなり少ないと思った」はなかったものの、5割以上の方が、多くはないと感じられたことがわかった。

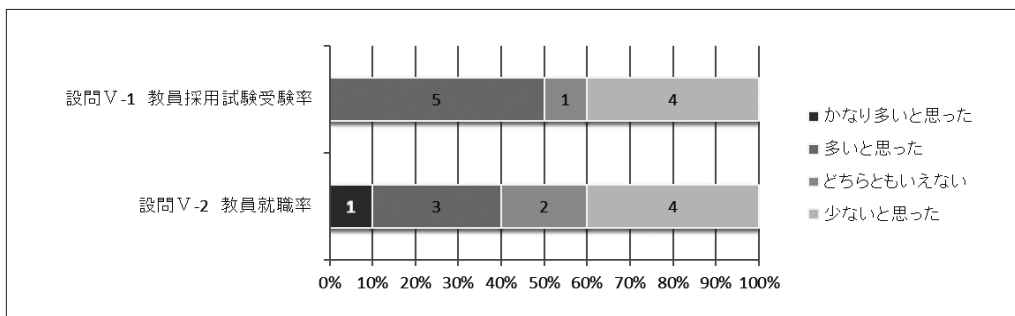


図3 設問V-1, V-2の集計結果

**<入学希望者動向について>**

設問V-3 本学部への入学志願者を増やすためには、どのような方策が考えられるでしょうか。みなさまの視点からのご提案をお聞かせください。

**【ご提案】**

- ▽受験生にとって、受験科目の選択も重要な判断材料となる。
- ▽教育学部で学んだ「人を育てる手法」は幅広く活用できるので、教師以外を選んだとしても、そのステップとして教育学部に進むことは否定すべきではない。
- ▽保幼・小・中・高・大の連携、接続を充実させ、島大の魅力を若い頃から感じる方策をとるべきだ。
- ▽教員という職業を魅力あるものにしていかなければならない。そのためにも、小・中・高におけるキャリア教育やふるさと教育をさらに積極的に進めていく必要がある。
- ▽1000時間体験学修の成果をもっとアピールして、広く県内外問わず社会に浸透していけば、学生も保護者も強い関心を示すと思う。
- ▽教師力の三つの力は様々な職種で重要なスキル。1000時間体験など特色のある取組を通して教師である以前に社会人として人間としての力を身につけることができ就職にも有利だとアピールしたらどうか。

▽学部「内部」に魅力的な教師や設備、カリキュラムがあることを効果的にアピールすることが重要

▽先ず大学の教員が学生指導に十分向きあえるよう、人的配置や学生指導以外の職務内容の再検討などの配慮が必要ではないか。

▽島根大学を卒業して教員になったOB、そして現役の学生さんの中で、島根大学教育学部に入ってよかったという具体的な内容（少しはデメリットも入れて）、感想を冊子にして、受験生に配布する。ホームページで公開する。

などの意見をいただいた。

**【項目Ⅵ：その他、学部に対するご意見やご要望など】**

これまでにご回答いただきましたⅠ～Ⅴ以外の事項につきまして、学部期待您的ことも含め、ご意見やご感想がありましたら以下に自由にご記入ください。

**【ご意見】**

▽教員免許取得を目指す一方で、他の職を希望して入学する学生がいることは承知していますが、4年間の学びや、様々な体験を通して、「教員っていいな」と思える学生が増えることを願っています。そのためには、私達が、教育現場を若い世代にとって、より魅力ある職場にしていかなければならないと責任を感じています。

▽鳥取県には教育学部がなく「教育学部ロス」による様々な課題があることを実感している。島根大学が山陰地方の教育学部として鳥取県にも今まで以上に関わっていただきながら、〈人財〉を送り出してほしい。評価委員はとても意義深く、参考になりました。ありがとうございました。

▽山陰地方の教育系国立大学としての存在意義は大変大きいと思います。一方、県立大でも小学校免許取得が可能となり、学生の確保に一層厳しい状況になることも予想されます。教員採用試験の実績が高ければ大きな魅力になると思います。…身に付けた能力を生かす教員に就けなければとても残念です。よって、社会人になったときの基盤となる能力を身に付けると同時に、打算的かもしれませんが「教員採用試験に合格する術も身に付ける手立て、指導」を一層重点的にされた方がよしいかと思います。学校現場としては募集資料を作成するのも結構大変なので、最初から「10月には3人の学生が支援に入る」等がわかっていたら、それなりには対応できると思います。現任校では、セメスターとして11月から長期にわたり男子学生が1名児童支援に来ています。各担任から引っ張りだこ状態…優秀な学生さんで、しっかり活躍しています。

▽「教員になりたい」と強く思う学生をどんどん育成してほしい。そのためにも、大山青年の家も子どもと一緒に活動するなかで、多くの感動を体験できるような企画を考えていきたいと思う。今後ともよろしく願います。

▽このたびの評価委員を通して触れた学生さんたちが、目標に向かってしっかりと力強く歩む姿が印象的でした。また、教育を学ぶことは、次世代にどうあってほしいか、それを導く自分



はどうあるべきか、また社会はどうあるべきかという理想をもって社会の問題に向き合い行動していくスキルを身につけることだと気づかされました。これは現代社会において大変重要な価値あるスキルだと思います。そうした力を身につけた人材が教員のみならず幅広い分野で活躍してほしいと願います。最近の若者の体験不足は否めませんが、1000時間体験で補完されている点は大変評価できることと思いますので、他の学部でもぜひ取り入れ、実体験に基づく高い知見を持った人材を輩出してほしいと思います。これまでの教育学部の皆様のご努力に敬意を表するとともに、このような機会をいただいたことにお礼申し上げます。

▽教員採用率や就職率という数字に評価される比重が大きいという点も十分理解できるが、教員を養成する専門学校ではなく、「国立の4年制総合大学」である、との魅力をより強く打ち出される改革が必要と感じた。偶然だと思うが、面接道場の際「教員を志望する際、強く影響を受けた人はどんな人ですか」との質問に…島根大学の教員の名前が出なかった。…教員自身が、担当学生の指導に果たして十全に時間をかけて向き合っているのか若干疑問が残った。教員養成学部の学生指導に先ず重要なのは、教員となるための専門領域の知識力の取得ではないか。まず、大前提としてその知識が十全に培われていないまま、アウトプットの面接力や対人関係のスキルが向上してもバランスを欠いてしまうように思う。教育学部の教員数が、現状の学生数に対し必要な絶対数を確保しているのか、また、果たして学生指導以外の業務に関し大学の教員を割り振りしなければいけない業務内容なのか再検討していただき、学生と向き合う時間を増やして欲しいと思った。学生指導や専門領域の研究以外の個々の教職員への負担が増えようと、教員の研究に打ち込む時間が減り、その姿を見た学生が研究に対する興味関心を失ってしまうのではと懸念する。…内部資源の活用によって、「島根大学とはいかに多彩な人材が揃っている総合大学か」を学生が、そして教員自身が知る機会を設けることが、結果的に自校に対するプライド、愛校心が培われるのではないか。…存在意義が保たれ入学志望者も増えるのではないか。…大学全体が殺伐とした印象で、活気が感じられない…学内全体のデザイン計画が更新されてもいいのではないかと感じた。

▽教育学部の学生さんは入学時から目的が定まっているだけに、4年間、しっかりと学んでいるという印象を受け、とても好感が持てました。地域の将来のためにも、教育学部を地域で応援していかないといけないと感じた次第です。今後でもできることがあれば、協力させていただきます。いい経験をさせていただき、ありがとうございました。

▽島根県において、島根大学の学生さんは将来有望な若手人材です。…そのような有望な学生さんにより地元愛を持って、自分たち松江を、島根を変えていくんだ。そして同じ思いの子供達を育てていくんだという思いをもって頂けると喜びます。今回評価委員にさせて頂き、わが母校のことを改めて、いい大学だったんだなあと感じさせて頂きました。当時に比べて、先生方の熱意、幾分過剰かと思うくらいの至れり尽くせりの体制に驚きました。その分気になるのが、学生が本当に主体的に自分の思いで動いているのだろうか。何か学生に、ものすごくいい加減な大きなテーマを与えて、自分たちで何か行動を起こすようなことをしてもらってやってみるのはいかがでしょうか。…先生方だけが、生徒集めに必死になるのではなくもっと学生を利用すべきです。そうすることによって、学生にも大学愛やこれから進むべき将来が具体的にみえてくるのではないのでしょうか。…これからも何かお役に立てることを考えていき

たいと思います。評価委員会で出会えた学生さん、先生方の益々のご活躍をお祈りしております。本当にありがとうございました。ご縁に感謝！

などの意見をいただいた。

### Ⅲ まとめ

以上の結果を項目ごとに整理し、今後学部として取り組むべき課題を俯瞰的にとらえてみたい。

項目Ⅰの「存在意義」「貢献度」については、認知度を高める努力が、なお不足していることをあらためて痛感させられた。委員各位からは、アピールの方法について相当具体的な提案をいくつも提示していただいております、それらを参考とさせていただきながら、学部の広報活動に一層力を入れていきたい。

項目Ⅱの「1000時間体験学修」については、活動の場や内容をさらに広げ、高等学校や、親世代の社会に触れる機会を作ることを提案された。また、活動の受入先と目的意識を共有すること、学生に対する事前・事後指導を徹底することが必要であると指摘された。1000時間体験については、目的と方法の両方について引き続き改善し続けることが必要であると再認識させられた。また、ここでもやはりPR不足を指摘された。

項目Ⅲの「面接道場」については、その意義を認めつつも、目的の設定の仕方、目的に即した企画の形態、具体的な方法などについては、多くの課題があることがわかった。また、専門領域に関する質問について、学生の回答の中身が希薄であったとの指摘をふまえるならば、学部教員による専門的な指導に反省すべき点がないのか、あらためて検証する必要があると考えられる。

項目Ⅳの「学生の育ち」に対する評価については、全体的に肯定的な評価をいただいたが、その一方で、面接道場や学生懇談会を通して直接接していただいた学生からだけでは、学部全体の評価が困難であるとの指摘もいただいた。これは、学部教育活動評価委員会のあり方について、一層の改善が必要であることを示している。学部教育活動評価委員会の協議の場においても、学生と直接懇談できる機会をもっと増やしてほしいという意見をいただいている。次期以降の課題としたい。

項目Ⅴの「就職希望状況や入学希望者動向」については、入学志望者を増やすためのさまざまな提案をうかがうことができた。そして、ここでもやはり、教師という職業や、本学部の教育について、積極的にアピールしていくことの重要性がいくつも指摘された。すでに実施していることであっても、あらためてその意味と方法を問い直し、より効果的な広報活動を展開していくことが必要であると考えられる。

なお、項目Ⅲの回答のなかで、以上とは異なる観点として、「大学側が担う役割が多いように感じた。大学側が担当する部分と、外部に委託する部分を精査する必要があるのではないか。マナーや面接対策などの一部は外部委託してもいいのではないかと思った。大学教員が、専門領域などの指導を重点的に担える環境づくりが、結果的に「教師力」となって学生の実力向上に繋がるのではないか」というコメントをいただいた。これは、学部の人的配置の課題に触れたものではあるが、一つには、学部教育活動評価委員会のあり方として、学生個人に対する

日常的な指導を視察していただく機会を設定できなかったという点、また一つには、学部教育の内容的な充実を学部教員自らが再度点検する必要があるという点において、これもまた学部・学部教員としての重要な課題であると考えられる。

以上のように、すべての項目にわたって示された意見をふまえるならば、今後本学部が取り組むべき優先課題は明らかであると考えられる。貴重なご意見・ご提言をいただいた学部教育活動評価委員会委員各位に対して、あらためて篤く御礼申し上げたい。

#### 参考文献

- 1) 『教員養成GP報告書戦略的FDによる資質向上スパイラルの実現』 島根大学教育学部 (平成19年3月)
- 2) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第四期（平成22年・23年度）の評価票から－」 島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.11』 御園真史・百合田真樹人・原丈貴・田邊美沙・河添達也（平成24年7月）
- 3) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第五期（平成24年・25年度）の評価票から－」 島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.13』 原広治・塚田真也・畑智子・河添達也（平成26年7月）
- 4) 「学部評価活動評価委員による教育学部外部評価の分析－第六期（平成26年・27年度）の評価票から－」 島根大学教育学部附属教育支援センター紀要『教育臨床総合研究vol.15』 原広治・畑智子・河添達也（平成28年8月）



島根大学教育学部附属教育支援センター研究紀要

『島根大学教育臨床総合研究 2018 Vol.17』掲載